宝八至四

九十

内閣文庫
和書 類 二五五〇〇號 五冊 二〇一函 二〇架

内閣文庫
番號	和	25500
册數	5	(5)
函號	201	611

宝八将巻第九

釋教部 總哥

何ハ薬師如来の誓あり
お為法師結縁ことゝめふよ覧
此よ君の文字ゝとよく見へ十二大願
乃ふ経くとよ表て哥ついて侍り
言数

第一大願經曰自身光明熾然
照曜無量無數無邊世界
昼ふし何の故法乃光やまみくまも
もらさらくさそれてらしますらむ世

第二大願經曰身如瑠璃内外
明徹淨無瑕穢光明廣大
くもりなくみの秋月やとのつらね

ゆめうしかく風くゆるをかしまし紀

第三大願經曰莫令衆生有所
乏少

しるくもちらひやまて民やさく
うゆくこのみをせとたふく華

第四大願經曰行邪道者悉令
安住菩提道中

ありの名此内かのえみちぬまい
きりこともかさきよし海ちる名

第五大願經曰一切皆令得不
缺戒具三聚戒

具ちとえくこひのいましめ海ちるあい
はくまるつらもけまと消ぬへし

第六大願經曰一切皆得端正

黠慧諸根完具
雲霧もはれし法の風ふけはさやけく
もとのすかたや月そ見えける

第七大願經曰衆病悉除身心
安楽
くるしみし仏乃ちかひをたのみとして
かゝやさくにこゝろいそろ葉は

第八大願經曰轉女成男具丈
夫相
うきからくは法乃まことをその身なれ
みつの法しる事何しかいはもし筆

第九大願經曰令諸有情出魔
羂網
にこりなく照ら乃海の清き波は

まよひぬるてわせんいつのふかき入ぬへき

第十大願經曰皆得解脱一切
憂苦

あそひしこの經法ぬちかひあるなきは

みのうさいひもなきのわかきまし

第十一大願經曰飽足其身後以
法味

らい世はいあふてよかきちしこ

さしもふみよくきのとしの無や

第十二大願經曰即得種々上妙衣服

又云隨心所翫皆令滿足

いやましに地のひさむろにかしこく

まみしきことの身よりまゐる

山田といふに深く清水あるといへる寺

おりて観世音をくせ給ふを教かく
いとふ御あり世人さて紀の観音と
稱奉けり此時請くれは
あまり此僧都并とこいましうき
又そ乃哥とよみてきこえ侍りける
發心の心を詠と
まくせられ給ふうましきと山あまりし

かふきは高し御名のこと
讀り
き詠人乃心あまりやきよみん
めくこあ里ゐ稱くき御佛不れ
稱名
松風のうきれ気をやむよ婦ゝ世
しく世なき法きん了悲小かいなく

解説

とかくくら紀無乃差も見えて侍し
よろふるのむかしもしらぬ御法
の名と句のよみあるく
蔦のすむにすらぬちらりと世漏の宗に
教へしはそれしかし那
ところ彼寺乃等と折句にて

にかくしの作へまし手数
せさせ給へぬいかにこのみちに何人と
いふ緒に法乃師ともいそ侍し
赤名といへる紙の何かし乃家に
かくいふに岩屋有てむかし深
うくま里とすまいはしく
生数その中に此大なる宗へし

弁財天の壽命し切にあらく阿弥
かし讃寺を錦をかさて進
しけらむ
うこ紀おなま座乃くちにこそたく
浅の月末まてかくさう字書して進
お形しんを
角さりふ岩屋をしめくて弥ふ

此乃紀恵乃きは書てそこのしこさ
大平山にまて梵字女さん
をせ乃おゐ経こく浅く修生
此姫は開帳おほしては
佛にて
きうえけちの山をはうかせぬ姫る
ちるへしゑくあし清のむもふさ

国立公文書館
National Archives of Japan

ひとまつ川のともし火とみえて
世の人あつまる縁の庭やてらすらん
うきし夕涼ともし火
さん弟登み綾く
今こそ桜ちりふましい桜の字とい
ふくるや門に隠てしますを
享保比と坊の書うつす那

住吉の社はふりかへ有し頼み
よみかくまていまに残りけり歌
身やかへをそ桜すみよしと行ふきそむ
あつる紀清く家外の家井をそ
万代も流るると家ふ桜の枝来ん
とほいかさりし住よし乃露
を浮ぶ船の出の繁ふ松のきり御幸

若の海とりまにも神のめくみふく
享保十あまり九とせの春ひもち
の正康御神宮にて詠て
ほとゝ神さひにし李かしは海山
なしこ紀恵いや〱まさのまさる
下照姫きたる難れの家まて
吹しきや花の色御みゆる風の

にふりかくれ神さかりまさん
長柄の橋は浦ちかく
世をうきと人をへたてゝきにて入
長柄の神君は〱むかしから
稲荷詣
いなり坂にふきくの旅人君
かくみ神のしるしと三河の郷の紀

玉津嶋

風いくへ忍うらと沖の白浪にて
名をしおきつる紀の玉津嶋姫

新玉津嶋

君か代とおもふ跡といのる神かけて
ならへてたえし七本松

宝八番歌合十

賀歌

弥生乃としめ子を年ふ尚まうり
之縫いとしく縫みいのりれきんしや
清水よしりことよ寿とう越りの松れ
末悠ふひるる清乃月ふの神ぎや
千代よりふりつ也とりひ松こを行ん

おとろく七種をつまふきてくかれ
之賀へよみてまいらる
七種よ寿祝ひそめ川く鶴の子まれ
らよれちりひ乃野や佛しちつ也
京てしいまそりまる人の出ても
の賀をよめとて題を賜り詠ひける

供菊延齢

君かよはひ千歳も月とうつくし数
も清はゝかきりをしら菊の花
かれし人の八そし代の影に
萬子春友
ありしわくまと浅きて幾千世の
よりひれ友となおくうきり哉
波とりこまに良きし波のふる人の

ふそしの賀とよめとて題を給られ

し哥

松契遐年

まつ清き代よりしと去ふちきら垂て

ときうる経経てぞ迄もいくちよ

賀乃題を給りて

竹不改色

あまれ撰みをそひてくさ河の
ちりし流れて千世のかずを数へて
むかしの江都より六そぢの歌を
題をくらべ撰出歌

春歌

ゆき返し老ぬ年はまさりけん玉の
としの尾ものの紀書を津まし

年月を経りまて七そぢの歌を
こよふ作くく人くくがよみくらひ
を撰ハおしかう後思ひて哉らり
うくかきはて出る歌

わか津ちの　ひらけし代より
ふしみくを　時とまちへ歩
久しかるらん　光のしと紀

国立公文書館
National Archives of Japan

にほの宮り　かすみを衣
春の来く　谷乃戸いつる
うくひすの　かきねの梅に
折りに驚　聲をうらてす
にへ清りて　人の心も
との川ら経　むかしをこのす
いさみりを　志らね山ぢに

あしりゆき　う紬さいそかく
木のもとに　はかなくりく
ふともおく　若葉にしかる
夏山のけ　神かきにさん
色のかはて　さけきみ庵に
しを古行る　ゆふの露てこそ
流そよきつも　風も涼しく

はなれきて
わくらそふ
そ見はく也
うら葉をふや
またの紫を
わらみし花
ちほみしき

七夕はわ哉
わ染けりを
なかき月を
冬つきを悩る
されとるとても
竜田の山を
見しくのこゑふ

いう飛月
その海の
むらふ岸ふ
画さてまく
ふり出きせ
はらつれきこ
見ろまくふ

時雨〳〵し
つゆより霧を
庭も海の花を
梢〳〵てし
ゆきき抵かしさい
木毎のむ
はなれくて

いつまでも　としの尾ならく
かゝへこそ　まけるゝと
むかへ清く　ものゝしらぬ
はくくと　おもひそへをい
さゝ娘うつ　波もゆきこふ
か夢もなく　治教や代々
朝日々の筆　志川奉祝への

ちらぬ秋の　そせるさらく陰の
むとおちふ　世の千代のは
ら流りけり　こゝつ代々娘
松竹より　よりひのまち春を
ちきりそ紀　おきふしけれは
庭の雨に　流るゝそく娘
い絵くを　見るゝゝちわ来

さよひすに　きに雲井と
おもひやま　んとかりを
いけとなく　地ねも山まて
はかなふ　志ろいかきとも
いつはの乾　むすね住居の
はきこなさは　よしすかとふ
月くとくま　なかりはとこふ

ちぬまへと　さ松も母思ふ
そは嫁紙　いなさとされは
あゐかなく　まつとも惣まん
あつて見て　そのことくしも
まつ能しくに　秋舟乃うら浪
うちいてて　かひすかはる
ことくさの　とりなつつらの

とろかさ絵　思ひうる清く
ころゝし娘　ころもやすると
今定〆り　くねの八千度
おさへ〆毎　何さ絵ん乃
わさ海しく　桜出りき海ホ
米としゝと　いそきん経と
きれしこそ　すく流乃ち四の

なくさ名を　思ひ清しそて
りふとくゝし　非
何りくち絵米芸秋のそくすうん
花や何紫〆し老絵川まで綴て

此書因心友之需染禿筆乎

簗濟巴水

国立公文書館
National Archives of Japan

石冢主母氏詠歌跋

余遊富吉石冢氏家見主母氏觀其所詠國風玉質金聲成章盈簡余乃不覺歛容起敬曰稽古

先王迺文國風惟盛朝廷閭巷以矢其言無非九功之歌宮媛閨娥相與爲詠亦被二南之化是以傳誦彤管之辭有關婦言之婉而

中世政殊其俗亦變矣作者猶爾不乏女流蔑焉莫聞所謂

先王之教者茲睹主母之什焉若有采風庶亦求野歟且夫好古者必尚其世尚世者必行其則然則石冢氏母推之內則亦猶文伯之家教以古訓也家範攸立母德可敬請余有言愧道未習敢題所聞姑應其索乃爾

室北八嶋總跋

和歌の傳はれるも北源幸し

高きもいやしきもおのかさまさまに

あらふ事此集の序に

いくるかしく志かや此八あ

遠と志道をこきまくしるも

おほく何るか中に下野の國起

服元喬識

英郡冨吉乃里に石家氏乃
花の春ちかきを出来秋の倉守
といひつは梅かよる香崎のみ
ちかき心をよせ和歌北浦北玉をし
すく清のましいんでも祢ら
云あ海きな流ふなの住北
といひくと春のしるし秋の

歌葉に心を深くしといひし守
う思ふあらぬうつせ人
圓うよあみえしをふ人多ゝ
あくあかれ其名をよふ
る葛田在満つ律友淳に
みせしむ北ちりちら萬葉の篇
つ波木とつにあそふ玉延

おはやかくこそかしこく
もみせけり女もしもちか
やまさるあさりしまくまか
とに東し海のみちかなる
これりは清くのへの歌
文はしまく川海のたまか
帰く求めさらんにかゝるある

もの哉なかひとるなりそいは
あまくあまのかりし波
たのみちはいともしくう
まく思ふほとりにあてゝ
かの人も庭かゝ露を
し駿河にてむかへ来
女そのよはなりけりしくて

夜し海の岡し流を汲
むこそあれはとて事にも
見せ侍りぬ花紅葉のい
ほひは清香てもこその
まかるにはいかにもよき
作れる此方ともかくも
みな作りにおもひやりの文と

五条の三位ものゝあはれかゝる
ことなれとも、いひし思ひ入ぬれは
かゝりける此ことはの花此流家
と出てくちたる事の木にお
流れかのことし草葉あり
なし中に其境の名ある
よせてこゝろを此心をよみける

五条ノ已

日本政府図書

聊也前之書の若干出しはべるを
取てあやまりを改め室の八嶋と
名付京で梓に刻し侍るもの
なり

宝暦六年春二月

藤原士魏識

書林

大坂心斎橋順慶町　澀川清右衛門

京堀川錦上ル町　西村市郎右衛門

江戸本町三町目　西村源六

書林

江戸本石町三丁目
西村源六

京都六角御幸町
西村市郎右衛門

大坂心斎橋順慶町
澁川清右衛門

国立公文書館
National Archives of Japan